

第3回 精神障がいのある親とその子どもの支援に関する学習会 報告

平成29年5月20日(土) 13:00～、日本福祉大学東海キャンパスにて、「第3回 精神障がいのある親とその子どもの支援に関する学習会」を開催しました。

参加者は38名(スタッフ含む)で、参加地域の内訳は、関東7名、三重を除く東海13名、関西7名、九州・沖縄2名、三重9名と昨年同様各地からお集まりいただきました。職種や立場も、医師4名、看護師・保健師8名、臨床心理士3名、精神保健福祉士12名、保育士1名、学生4名、その他(相談機関・就労支援等福祉機関、ボランティアスタッフ等)6名と様々で、多方面からこのテーマについて意見交換することができました。

第1部：話題提供とディスカッション(13:10～15:20)

“ふるすあるは”の北野陽子先生・細尾ちあきさんより、『家族全体の安心に繋がる「情報と伝え方」って？ー絵本・サイト制作の試行錯誤からー』をテーマに、子どもの方や親御さん、支援者の声の紹介、絵本の読み聞かせなどを交えて話題提供していただき、その後、参加者で意見交換しました。



Q1：サイトの資料等の使い方について

⇒1対1の面接で使っていただくなど、個人使用については構わない。グループ等で使用する場合は、一声かけてもらえるとありがたい。ダウンロードしたものをリーフレットなどに入れるのは扱いが異なるので難しい。今までになかった素材だと思うので、どんどん使ってってもらいたい。ホームページの中に著作権利用のフォームがあるので、それを使って知らせてもらえるとありがたい。

Q2：絵本に動物が描かれることが多いが、動物はやはり効果があるのか？

⇒相棒として登場させている。子どもが動物を飼いたいと言った場合、ちゃんと世話ができる状態にあるかどうか確認し、そのことについて話しあうことが大事だと思っている。安心のアイテムとしては、動物に限らず、その人が好きなものがアイテムに繋がると思う。

感想1：子どもへの対応は十分できていなかった。絵本は、自分のペースで好きな時に手に取れるので良い。保健機関には置いてあるので状況に応じて使えるアイテムとして活用している。

感想2：子どもがいる患者が入院しても、スタッフは子どもに目が向いていない。外来で子どもに会うと、「大丈夫だから。1か月したら帰ってくるから」と伝えていた。子どもに伝えていいのか？と確信が持てなかったが、今日の話聞いて間違ってたかと思った。

Q3：小さい頃に親の障害について説明を受けた子ども、説明を受けてどうだったかという声は得られているのか？

⇒小さい頃に説明を受けたというわけではないが、幼少期から関わりずっと関わってきた子どもがいる。状況に応じて、生活の仕方を教えたり、保育園への送迎のサポートシステムを作ったり…としてきたが、コツコツ関わり続けたことが、困った時に困ったと言って来れる場・助けてくれる場になっていた。



私たちの研究結果でも、病気のことだけでなく、応援するメッセージや自分を大事にしても良いこと、病気を前向きにとらえる視点などがあつたが、今話を聞いて、安心できるようなメッセージも必要としていることがわかった。

Q4：クリニックについてくる子どもも多い。診察室に入らず外で待っていたりする。病気のことを聞いてみたくても、親が拒否し、診察室に入れなかった子どももいた。子どもにも聞く権利があるのでは？と思う一方で、親の了解がないと伝えられないというのもわかる。こうした場合、どのように考えると良いのか？

⇒親が診察に専念してもらうためにも子どものケアを行っていた。じょうずに役割分担できると良いと思う。

親が拒否する場合、何を気にして拒否しているのかを聞き、その思いを共有していく。また、子どもに繋がるコメディカルが子どもが何を知りたいと思っているのか把握していく。

診察に子どもを連れてくる患者はいる。子どもに「心配だよ、どんな気持ち？」と聞いたり、「こんな風で頑張っているんだよ」と話すことはある。子どものことを忘れがちになってしまうが、ニーズを引き出して、どう？と聞いている。コメディカルの職員が子どもに接近することについては、それぞれの専門職の強みがあるので、その専門性を発揮して接近してもらえばよいと考えている。

感想3：東大阪でアルコールを考えるリーフレットをふるすあるはさんの協力も得て作成し、学習指導要領で指導することになっている小学校5年生に配布した。その後のアンケートで、子どもは「自助グループがあるとわかった」や「回復するとわか

った」と挙げていたが、教員は「回復できると知ったら病気になっても良いと考えるのではないか」という意見が書かれるなど、大人の認識の方が問題かと思った。周りの大人がどう考えるか。子どもへのアプローチだけでなく、大人への啓発が並行して必要だと感じた。

感想4：子どもがいる患者には説明できることも伝えているが、診断名が下されていて、本人に告知がされている状況でないと、周りの者に伝えていくことができないので難しくなる。当事者の困りごとは、生活面の困りごとが多いので、医師が説明できることも少なく、コメディカルスタッフがすることも多い。

Q5：ふるすあるはの絵本は、最後に支援者向けの言葉があるのでありがたい。支援者で意味を取り違えていることもある。支援者への声かけの工夫も必要だと感じているが、支援者に伝える時に実践されていることはあるか？

⇒「子どもの前では親の悪口はいわない」を鉄則としている。子どもは大人との関係のみで、大丈夫な人が判断している。難しい話ではなく、“身近な人”と感じられるようになれば、ピンチになった時に頼ることができやすくなる。

親にネガティブな感情を持つ支援者に対して、病名にとらわれず、目の前の人の困りごとと一緒に考えるように、病名に持つイメージと目の前の人の困りごとを結びつけないようにと伝えている。また、ネガティブな捉え方に対して、その人（支援者）自身が今、疲れているのかも…と考えるようにしている。

第2部：今後の学習会の進め方と各機関の情報伝達（15：50～16：30）

☆ 各機関からの情報

1) 親&子どものサポートを考える会（三重）

毎月、「子どもの集い」を実施、年1回「全国版 子どもの集い」も行っている。その他、支援に当たる方に親子の状況を理解してもらう「支援者研修」を実施している。今年度の支援者研修は、6月18日に実施予定。

2) メンタルの課題のある親のグループワーク（沖縄）

沖縄で3か所実施。事例検討を行っている。

3) 円グループ（東京）

PCG（親と子どものグループワーク）を実施。訪問看護の対象で子育てをしている方をグループ化。子どもに対しては子どもらしい遊びができる場を提供している。グループへの送迎もしている。

4) ヤングケアラー（埼玉）

ケアをしている子どもの調査や啓発を行っている。ケアを担う子どもに、精神障がいの子どもの親の子どもも多い。学校からも発信できるようにしている。調査結果は、ケアラー連盟のホームページから閲覧できる。

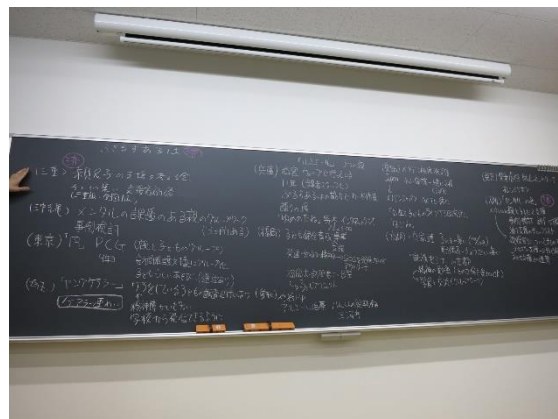
5) ルミエール（兵庫）

うつ病の親の支援を西宮で行っている。11年経過。当事者スタッフもいる。ふるすあ

るはの協力を得て、カードを作成した。語りの場の実施。「夢のたね」というインターネットラジオを、毎木曜日 23 時～やっている。

6) 子ども健全育成支援事業（福岡）

発達障害・知的障害・精神障害では SOS を発信しにくいのでそれらをアウトリーチで繋いでいる。今年度から、福岡大学・訪問看護・B 型事業所の協力を得て、子どもプロジェクト（子どもの居場所づくり）を実施する予定。



7) 刈谷病院（愛知）

アルコール治療でハルくんの絵本を使用し、三河弁バージョンで用いている。

8) メリデン版訪問家族支援（愛知・JAPAN）

当事者・家族と一緒に支援できる仕組み（訪問）。現在、北海道などで実施。ACT と一緒に行っている。メリデンジャパンを立ち上げた。

9) 女性と子どものライフケア研究所、なごみ（愛知）

研修案内やリーフレットを置いたので、活用を

10) 京家連（京都）

2 か月に 1 回、子どもの集いを実施。他にも配偶者の集いやきょうだいの集いも実施している。

家族セミナー in 京都の実施。精神に関する勉強会＋交流（グループワーク）で家族・支援者どの立場でも参加 OK。

11) 児童虐待防止ネットワーク（東京）

オレンジリボンの活動。

12) カンガルーの会（大阪）

メンタルヘルスに課題のある親の子育て支援。事例検討を診療機関・訪問期間・大学の 3 者で実施。子育て支援のチェックリストを作成した。親役割についてまとめた。そこでは、リカバリー支援が自己成長に導くことなどがわかった。

☆ 今後の学習会の進め方

1) 次年度の開催について。

紹介のあった取り組みから次回、話題提供として聞いてみたいものについて挙手で意見をはかり、「メリデン版訪問家族支援」、「ヤングケアラー」、「PCG」が候補に挙がった。これらの実施機関を中心に話題提供を依頼していく。次年度も同様の時期の開催を目指して計画して行きたい。